

# 大槌町「津波防潮堤植樹会」と三陸被災地慰霊の旅

## ご挨拶と総括

NPO 地球の緑を守る会代表 高津啓洋

大震災から2年3か月目の5月18日、岩手県大槌町浄化センター敷地で、400人による5,000本植樹が行われました。

当日は地球の緑を守る会10人の会員と関係者の皆さんと共に、初夏の穏やかな陽ざしの中、汗を流し土にまみれながら、大津波から命を守る「緑の防潮堤」となる木を夢中になって植えました。その土地本来の樹種タブノキやシラカシなど15種類、樹高30～50cmのポット苗を一人平均10数本は植えたと思います。

木の成長は普通“ワンイヤー・ワンメーター”といわれ、15年たつと樹高15～20mの、高木・亜高木・低木・下草の多層群落の濃密な森が緑の壁として形成されます。この森が大津波のエネルギーを吸収し、人の命を守るとともに美しい景観をつくってくれるのです。コンクリートの防潮堤のように劣化せず、しかもはるかに安いコストでできます。各樹木は世代交代をくりかえしながら森全体としては次の氷河期がくる9000年まで持続します。

したがって、この緑の防潮堤が完成してはじめて本格的な市街地の復興が可能となるわけです。

震災がれきをゴミ扱いせず、樹木を育てる植栽マウンドに使っての防潮堤づくりは「宮脇方式」と呼ばれ、当時の加藤町長以下40名のベテラン職員を失った大槌町が二度と大惨事をくりかえさないようにと、“植樹の神様”宮脇昭先生の指導と（株）横浜ゴムの支援によって日本で初めて着手した“生きた材料を使ったハイテク”プロジェクトです。

気仙沼から大槌町に至る車窓から間近に見てみると、三陸海岸のリアス式状の湾ごとに発達した市街地は、ほとんどが街ごとなくなっていて今なお更地状態のままでした。震災直後から、「被災地の人々のために自分も何かできないだろうか!？」「復興のため少しでも役立ちたい!」と機会を待っていた方々が、東京から、関西から駆けつけて5,000本植樹は1時間半以内にあっという間に完了し、去年の3000本と合わせて8,000本の木が海沿いに育つことになりました。

地球の緑を守る会の会員の中には被災地復興を卒論のテーマにしようという大学生も居ました。

植樹会のあと、東京直行の夜行高速バスの出発時間までをフルに使い、大槌町、釜石市、陸前高田市の慰霊所を巡り、11名全員で心からの献花と深い黙とうを捧げ2万人におよぶ犠牲者の冥福を祈りました。

現地での移動手段につきましては、一関自動車学校様が15人乗りの小型バスをドライバーの方と共に差し向けてくださり、予定していたコースをすべて廻りつくことができました。ご支援熱くお礼申し上げます。

また引率者の私、高津を補佐してくださった大滝さん、ビデオ記録担当の山口さん、ドライバーの斉藤さん、主催者として実務面を支援してくださった戸石事務局

長および参加者全員の皆様のご協力に心から感謝いたします。

## I. 植樹会



御年 85 歳の宮脇博士が植樹の意義と植え方を指導



元気に育てと祈りを込めて植えました



優しく植え表土が流されない様に稲藁を掛けます。こうする事で保湿効果も有り、一ヶ月間降雨が無くても植えた幼木は枯れる心配がありません。更に稲藁が風で飛ばない様に杭を打ち荒縄で保護します。2～3年間は多少の雑草が生える為、除草作業が必要ですが、その後人手は一切不要です。



## II. 被災地巡礼

### 大槌町の慰霊所

旧町役場。ここで緊急対策会議をしていた町長や職員も犠牲になりました。



### 陸前高田市 奇跡の一本松

7万本の松で風光明媚であった所。残った1本の松も枯れ、写っている松は金属製(?)オブジェです。

慰霊所はこの近くに有ります。

### 釜石市の慰霊所

#### 旧防災センター内

大震災の前の2年に亘り、ここを避難所として津波発生時の避難訓練をしていた為、200人以上の市民がここに避難していて津波に襲われ、150名程の市民が犠牲になりました。

犠牲になられた方々の無念の叫びと救いを求める気配が全身にビシビシと感じられました。

